

知を紡ぐこと、 知を伝えること

横浜にある経営大学院(ビジネススクール)を退職し、昨年4月に愛知淑徳大学に新設されたグローバル・コミュニケーション学部に移ってから、早くも1年が経過しました。前職では、平均年齢30歳代前半のビジネススマンや社会人経験者を教えていましたが、昨年4月からは一転して、未だ20歳に届かない学生を教えることになりました。春秋に富む若者と日々接していると、気分が若返り、再び青春時代に戻った気がします。

ただ、この1年は楽しい反面、戸惑いの連続の1年でもありました。戸惑ったのは、学生との年齢差だけではありません。前職では、学生とともにマネジメントにとって有用な知識を「新たに紡ぎ出す」ことが教育の主眼になっていましたが、現在は、学問分野で蓄積されてきた普遍的な知識を「伝える」ことが大きな仕事になっています。

ビジネス社会を経験した学生や社会人が教員に求めていることは、既存の知識や理論ではなく、変転

極まらないビジネスの社会で即刻に役立つ、新たな理論や知識を共に生み出すことでした。一方現在の私に課せられた仕事は、先達たちによって切り開かれた普遍的な知の地平を、柔軟で可塑性に富む若い学生さんに精確に伝えることだと思っています。そしてそれをオール・イングリッシュで行うということです。

「知の創造」か「知の伝達」か。この1年、はからずも教育をめぐるこの2つの古典的ディベートを経験してみても度も思い出したのは、心理学者カート・ルーイン(クルト・レヴィン)の残した言葉、「優れた理論ほど、実用的な理論である」でした。「優れた知の伝達こそ、優れて実用的な知の創造を生む」という思いで、今は教育に携わっています。

